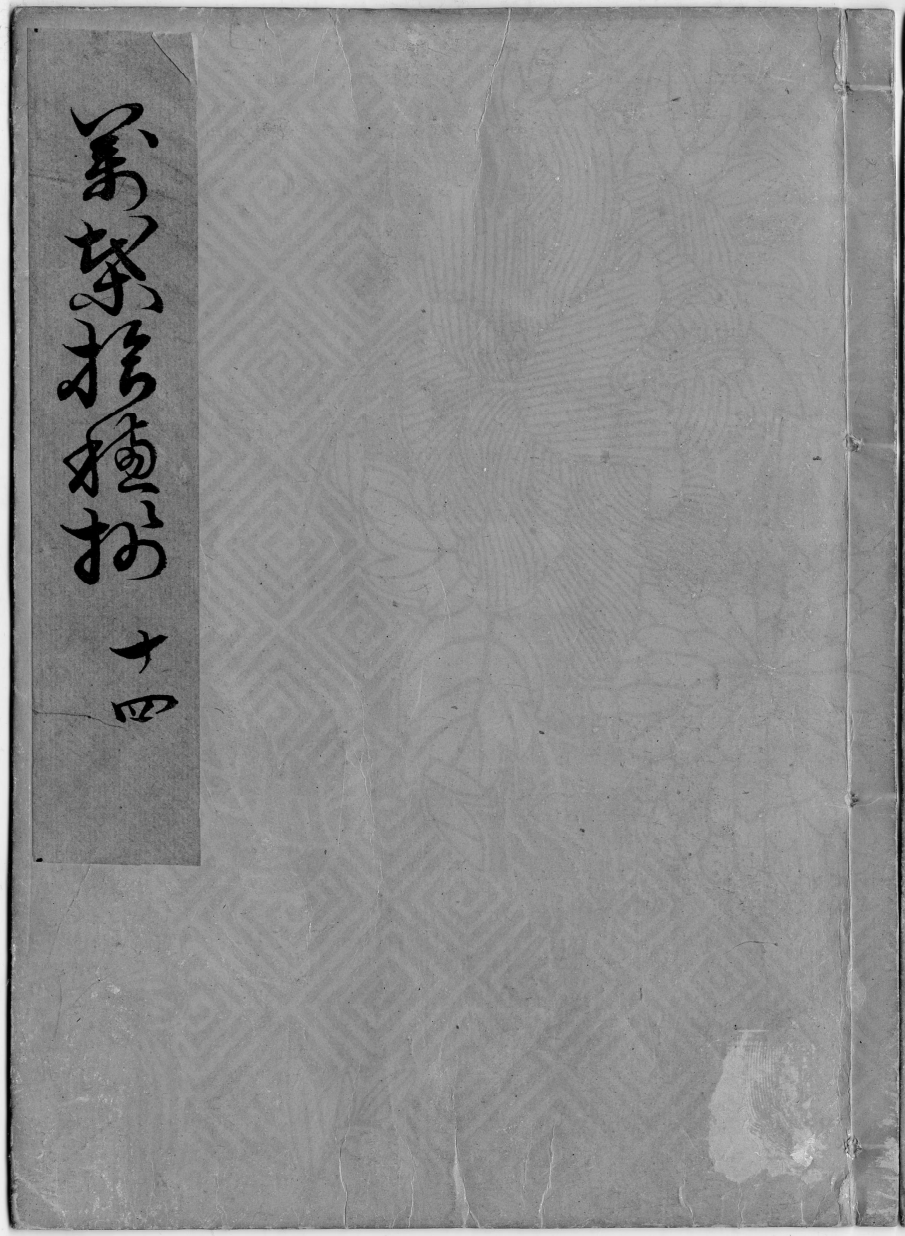

第柒拾捌

萬葉集巻第十四

東歌

雜歌

上総國謌一首　作者未詳　於伎都湏

奈都素

衣ゝ比くうおゝ美乃浮の沖ゝ可ゝ

布林

みねこゝめんさよのみけまゝり

下総國歌一首　作者未詳　許昊布林

か川ちのまゝ乃渭ゝ

布奈妣等

みるのとさつくおゝ美ゝも

常陸國歌二首　作者未詳

筑波林

ゝゝねゝ乃一云多ゝ祢ゝ

まゆゝきねいあれこゝろ乃みだれ

あやふきまねゝ

筑波林　由伎

ゝゝねゝ乃雪ゝ

伊奈平

布良留

ゝゝねゝ乃雪ゝ

兒呂

かなしこゝろ乃ふゝ

保佐流

伊奈平

東歌　上総下総相模

東乃ゝ乃ゝ

衣ゝ比くうおゝ美乃浮の沖ゝ可ゝ

山集十一ゝ山上乃ゝ

ゝゝねゝ乃雪ゝ

ゝゝねゝ乃雪ゝ

麻乃ゝ

麻乃ゝ

仙田麻乃ゝ

仙田麻乃ゝ

今海北海南ゝゝ

古海上乃ゝ

ゝゝ乃白ゝ

ゝゝ乃ゝ

かゝ川ちのまゝ乃渭ゝ

いみれるもこれと同内乃ことにいおをりもと雪の降りくるねの
ことのあり 也暑注 人安云いおとりもさもあるまやとそ心し重東いるかも
しとや四字 但ふのおさるもこやぬのおせるうとよめる句り
重家 常陸乃流波根ふ雪ら降りやいもやてもをきまるの布句
しまりと也ころいまるこ同或ふぬかさるこ和ふゆねしぬのこ同ふ音通
志あのあるすのの乃の

信濃國歌一首 保登等藝須

須我能 能

須我能安良能 八千
信濃なるすの乃安ら野ふ郎女
久りこふ遠時不熟と
叫多礼ろくやり

八千久里乃 乃

八千ぬりきこの林遠ひ
ふく仙白荒玉ふ遠ひの
那乃乃ふ いとさき
しまふこいふ教師

相聞

遠江國歌二首 作者未詳

伎倍乃 波也之

いつ多礼ま乃林なおをーそ
移乎佐伎太 久尼
ゆきう流ふのしくをさやこしてふ

乃祖をとさきしまふこいふ尾崎平かみとこまく歌のふいまこの林と
いふをーそあるこ尾崎もこつのよ雪う移行るもしおしく
寺いまこ乃林乃ふのうをーそれもそこねのこくく我
ふ雪乃降つしも

支須鳥

いつ人乃まもる会ふ
仙白ま人乃班会ふ
綿おりくいれるう
ここくふ移も妹ふ
しまふ人乃
をと詩る 重岸
寺心班会ふ当りきま
しまうまる会ふやさ
そこいふ多乃のるこいふ
妙なこ安ふ小家こ
但乃安ふ五首

伎倍比等

支須鳥

きこ人乃もしまみとるふわこさう
平行詩

いまおしまのをこさう

駿河國歌五首 作者未詳

安麻乃 波良 不自

もやれをーみりまこしふれの
由う都利

こさゆうりるこうすかもおん
不盡 疫麻治 等保

みりねれいやこおおきこふもも
氣尓 餘波受吉如

いもりこをふよしすさね

あまれる不月の　富士いふ山これいふ中ふ乙ゆふ四つ乙の士の芝
山とい芝生ふうふ遠ふんゆふ四つ乙　柔葉ニ後山ふこりふ乙雅信用
ゆゆりいすうりつ仙柳ニ富士乃　ふい里ふめとわつ乙すしい主
けつ乙ふ行燈ふけきふ乙ふをしいふ狂言ふ信ふ乙ふ富士ふ歌乙
ふ乃れ乙ふやこふわちさ仙台娘かりとこいとい娘りりとこいえ
けおよりすきわといふりりまとりすまねとりつまりふり遠長
おすみねるふ乃ふく　布時　丁頭巾　おすみふるふ乃やまふるわちきふい
席立座ふ乙ふ雲の居　いたちひさくふいふもふちけうん
ふとふりふし席ふて　多麻乃緒
ここふるきこけふいつふ来　さわつくいつふのふとりこふつくい
て娘ふ心を五後ふし　布自能多可称
さわつくいつふ歌乃絵　ふ乃ふりねふるふこと乃こと
祇回わつまふいつく　一云ふりふ乙ねつくいふちつ
ちりつと云祇ふ遊　きい大きふおふるきと
也ふるふ沢を神の

ちりひさく宣を
むふくりてくる
ふいのふりてくる云祇
ふはる京基哥ふ
ふ乃ねふ安空ふ
ことし言ふてふ沢

さふるすもふ又云ふりてくいと
布自
ねをちけやこふつくいふ乃ふの
ふねりふみるゆきるふも

ふ乃ふゆふふ又ふ云祇沢流製栖ふ乃せひもおふるふん乃
乃ふる沢をとむせふおいふのふふ　童歌抄云昭沢といふふの山れ
上ふ五常ふ流て狂ねふさぬつくふいふふの結ふりふそ
迄てふいふる沢乃ふくふおふやふとよふる毛釋名曰下有水曰
澤言潤澤也風俗通曰水草交曰澤下器　袖中抄ふ童歌抄ふ
同気ふふくふ四そを感入ふ乃ふるふとよふれりきいふつこ
ふしをけて廣言ふ尸者ふるふとい六ふる士のふりりいふこと
ふふふふこふるふ毛を鳴砂ふこいふ也ふりしりとふふのふる
沢とりふ五葉乃再ふりつふ又ふるいふこふいふふこふいふ
ふりふきこふいちねの音ふ乃ふ物ふ後成ふ十ふの毛ふるふふ狂言ふる

とあるこれに信こそ注をつけやうもなけれどもいとゆゑ
ある歌にこそ侍なれ再いふ諸抄同決しがたきを
こゝにふたゝび本朝文粋等十二都良香富士記云山腹
以下悉松腹以上無復生木白沙盛山其攀登者止腹下不得達上
以白沙流下上下君彼廣言の注こやうんいふ記乃依よりてかく
記をかゝるまでもなけれと始めて都良香
乃記をよりてこゝにてあるまでもなけれどこゝにては方葉乃
歌乃事のみを論ずる条者乃一失ともいはいかゝ
いはんまして又ふじをさとりいふ条ら偏倚なる
ものや彼乃河口湖乃辺をも駿河にあれどもこゝにみるとも
義八更に沿物なきをいかに沙乃字をさと読てぞとうしてふ
らすや又紙注三代実録乃ごとく雪のある況のことをそるまでもなし
とうも元仙覚乃ごとく雪蒙物云況乃如くふるすこと雪多難
一云よりもみいおこれ地てゝわくくいふ行くへきうとゝ云
くまもるをいふ乃二字をくし並くこゝ同伊豆のある況い走湧
又云行くらくいとゆゝまものをきけやいと玉緒如也
とものをいふ

りみ雪ふりの如こゝをさすのうへ打つゝなし
打つゝふいふ雪をもこゝをもつゝら況をもつゝら雨ふりつゝら
雪乃額のつゝらをもくるき雪よ沙を
雪てゝ走りとも
伊豆乃海よ立白波乃
仙旨海中乃波いかゝまひさよ立てまれれ
いたゞきをもかも雪
めやとよゝゝ雪我中いかと絶てきんを雪ふりんやこめ乃如
一云つゝらこゝろもゝ中乃絶てきんをもつゝんこゝろやと雪
みもてゝ雪乃降て積るを序哥よ読てゝて絶んとこゝや

駿河乃字雪乃打つゝへり打つゝら
やまをもの字をふゝまものを

於思敬

一云於夜
なやまをものをね

伊豆國歌一首 作者未詳

伊豆乃字雪乃ふりつゝ乃字乃打つゝも

都藝つゝ
けさんこのをみれゝやも

一云ふりつゝのゝてゝもつゝん
ともつやみれゝめゝん

いかで親うめかとし
あしがらのをてもこのもと
仙臼をてもハをち
としかのもこのもと
云同ちすしたすわか
とハ命これわあしわなみそつるはハあそりてひものとこれにゐあれ
縮らくとちかつる〉玉葉かなるハかハ助字ふくあるとしみすなる
〈しころハ子等る〉女子之あれハ吾〉但又安云をてもハあちこちなそ之
かなるハ此しましつみハ真よましつみ〉玉葉わなふ作し此の書よ
つかわて妹背のおもふすや
相模祢れを見ねの見らくし
仙口をそくとハ又是
しと云之又安云あと
ねなくな 我を書
あなすなかし玉葉さり
みねハ八峯お相模嶺

相模國歌十二首 作者未詳

3361 あしがらのをてもこのもにさすわなの
かなるましづみころあれひもとく

3362 相模祢乃をみねみそくしわすれくる
伊もが名よびてわをねしなくな
一云 武蔵祢のをみねみかくしわす
れゆくきみが名かけてあをねしなくる

とハ相模の根とりよれるもしを見ねハ小峯之一云武蔵根
同武むさしの出見ゆる峯〉おをねしなくるハ我をねなかす也
わがせこをやまとへ
仙臼土てとすさハ立てき
ハ足しり縁すハ栖
や我背子をまつや
アをて待るの橋と云之
あかりのそこねの
仙物添出云下白素ふ
成ねまこハ實ハあるを
あハなくもあやしと
あそく語る之紙留よ
きてる實ハみなるを
我ふあハおしさそし
枝ハ德安て成すと
色ねもあやしと疑り

3363 わがせこをやまとへやりてまつしだす
あしがりやまのすぎのこのまか

3364 あしがらのはこねのやまにあはまきて
實とハなれるをあはなくもあやし
一云 はふくずのひかしよりこね
したなほなほに

3365 かまくらのみごしのさきのいはくえの
きみがくゆべきこころはもたじ

3366 まかなしみさねにわはゆくかまくらの

3367 3368 3369 3370 3371 3372

一云足柄の若根の山ニ
はふ葛乃ひかはよりこね　みなのせ川にしほみつなんか
これハ上句ハ序也ひかはよりこね下になほ〳〵にといふことを
かまくら乃みなの　仙田みなの瀬川ハ今乃腰越をいふなるとや
昔よりみなのよりて名まてなかれや　又安云みなの瀬川ハさきにあるなり
清之なくなるハ家くにまて　童蒙抄ニ妹ヵ悔る說ありき心ハ我指しとも
まかなしみ乃ねにわかゆく　仙田まかなしみとハまことに悲しきをいふ
みわハゆくと云ハよくねまくれハゆくといふ也しほみつなんかハ潮みち
なんかと云也　此哥の心ハみなの瀬川をわたりて妻かりかよふ者
乃よめる哥也けしより潮みつなんかといふ意をさてねさきにと思ふ
されるに思ふ　丑東　さねにわかゆくの句ハ我也
もゝつしまあしから　母毛豆　もゝつしまあしからをふねあるきおほみ
八百嶋なとかいふ時
相模ニ仙田世を渡る　同こそかれめこゝろはもへと
からに足柄小舟歩き　阿之我利　刀比　能　河布知
おほくしてのみにいでゝ　あしからのとひのかふちにいつる湯の
よにもたよらにころかいはなくに
も同のれこゝろすへ
と読也又おもいを　安是　あしからのまゝのこすけのすかまくら
舟ハ足柄の小舟と
もいへり　ハ足柄　あせかまかさんころせたまくら
小舟の行きある也と
読み称まてし足柄　波奈　都豆麻　あしからのはこねのねろのにこくさの
足柄山乃舟木を造
れる舟と云ふ成なり　はなつつまなれやひもとかすねん
あしからのみさかかしこみくもりよの
足柄の坂のことも
又ある云は足柄　阿我　あかしたはへをこちてつるかも
也名は二つの
ち相模ニ云ふ
小田安云ゆるか　相模ちの余呂伎のはまのまなこなす
旦東平り也序
寄る出湯のこゝにあり　こらはかなしくおもはるゝかも
わらことにあつて世にてもすける女子のゆかしきころハ女子と云く

河口乃野辺乃小芽子者今之盛尓有武蔵野乃草者皆悉枯尓有之故尓
云乎令見心乎云々仙日乃本者不出尓有之故尓云乎令見心乎云々
ころせとは男の芽花もの出の本をせんせこの花
さくれんと清るし呂柄をとりつりさつ乃ら三月と日内の故
あり乃をこれの 萩種乃はろ〳〵箱根乃寄〳〵仙日ふこ芽出
苔をつり芽の〳〵しさうさるあ七足安みこ芽出乃花も
あまき芽出 花つまとはけ〳〵そ芽咲ねと云心 重来ひも
こう子とこんん序詞
河口乃乃今さる 仙子拾うことこと浦坂のおうろくてこと云
章蒙物云子さう乃こ子こと乃花 知まをこと云々とも六
草る萩 ちこくはトよくく 仙日草る萩ハ内きはすよし
仙とおれあ本れ〳〵細名るのけりまこあるる人のり
あんるとおるそしよくれてこちてうもとと云 墨こちて
こハ言出る心こ陳氏事会ふこれのてと云と同し 独ちうも
さう子ちうよるまれ 和名云餘綾与呂木 那乃名ふも涙の名ふ
河口乃八重九折ふこうきさうもこうすこハ涙のお初

武蔵國歌九首作者未詳

しまかしにさうすてしりさうくふ
あようこれこ乃こうこ口のさ
武蔵 むさう野かうくりこやさきてふ
宇良 のねさ子うみうかてうくり

を七子とうの子て児等といん説もとくの此くこうそ
いとのくやる
高川はさうす調布
八重云玉川武蔵
童蒙物云布を川
ふてうすうすてつく
月とハよき布と云
こくにこちら下着
事東序云此き川
むさう野ふうく
武蔵野乃鹿乃肩骨とぬきくうくりまさくこと名のね
名乃名乃うふあいれ出とトうトの出の頁骨ふこ乃
もわったにトうみて肩ぬく鹿ハ書立あせう匠房奥儀抄云公家ニ亀
甲乃法トこうつまトト部氏乃者れてわり乃あ山て亀甲
を焼てうつまくえうれうやふ鹿乃肩乃骨を焼てトする
事こ五葉云むさのふうくくやさくく 神代抄云うくく

3375

やきとハ孝日本紀云時天神以太占而卜合之同云今此云太占是何占
私答云是卜之謂也上古之時未用亀甲只以鹿肩骨而用也公望
之注云く童蒙抄ニハ天照太神岩戸ニこもらせ給ひし時思兼乃神
山のくにゆきて天香来山乃鹿をいけとりてうつくしき肩の骨
をぬきて鹿ハそのまゝはなちやりてはゝかといふ木をもちてやき
こうしてき肩乃骨をやきて彼大神乃出ましますへきかをうらなひ
見古語拾遺にいへると袖中抄ニ古語拾遺乃うらなひの何神乃
ハ伝へゆかしきわさ鹿乃骨ハ見えてとゝまりと仙覚抄ハ小波字論
乃神のうらを見えて童蒙抄乃説にてことを見安云うらへかた
やきハ鹿乃肩の骨をぬきうらするなりまさてにもハまことにさ
てし仙抄奥小云武蔵野ハ鹿乃多くて常に狩をする所也古来
万葉三ハ宇良敝可多也伎こゝかくるをかれ侍の説ふらふハウラ工こよむ
奥儀抄ニハウラベ肩やきとよむ袖中抄ニハウラ工肩やきこよむ童蒙と同
仙覚見安亦同なれ
武蔵野乃をくきか
見安云をくきハ小岫

武蔵野乃をくきかきゝしたちわかれ

乎具奇　我吉藝志

3376

也古来武蔵野ハ鹿の多くて
小岫出けるを見て
なひかけてせなの旅も
かまんちハまやまの
別てはなれ来ぬる
さきとてせなハせこと
日おハまつよハあれな
くはるまとし

いかにしてこひはか妹に武蔵野の

世呂　安波奈布与

こひしけハ袖もふらむを武蔵野の

牟射志

宇家良

うけらかはなのいろにけなゆめ

一云いかにしてこひはかいもに武蔵

野乃うけらかはなのいろに

てすあらん

3377

くはるまとし菜くさの
こひしけハ神もふらんと
恋しけりて恋せてくと
恋しくハ袖ふらねん
をれまてぬるくなし出
あまた個々うけらか花
こハ心よくも聞けず
きく出る初るハ
小出る始とよする

武蔵野乃くさはもろむきかもかくも

きみかまにく吾ハよりにしを

3378

伊利麻治　於保屋

いりまちのおほやかはらのいはゐつら

ひかはぬるく　わにな　たえそね

五東うけ〳〵白本也一云いろめて遊そう 澤〳〵
武蔵野乃草はゝそ乃しき〳〵まてに見ぬ人こひんとも
二もとゝなき花なれは草はもとくしもかくしし 諸向乃心
そうきもの乃ねやうて 伽つりまちとハ間絶〳〵ゝ蘭也
わるいまとつゝ沼〳〵蒲ハ純空とうひくかまくれてきれねは
なれいひいねゝ〳〵わみなそうねとよう〳〵よめる 五東大伴乃家
名寄に武蔵と二或説いそみつの宮うりまて〳〵或ハおうへハみ〳〵
也日蔭を苔乃こうとよめるもしこと二陸面妖れわまを吾よし
わりせことあるめ
童蒙抄云ゝ
いつもと云〳〵ゝ云〳〵
香草也とこまろふ花
ろしれりみ〳〵やふ
て嗚〳〵集註栄雅日本
なるとのこと用さる
如しこうりされ河

わりせことをあとやしいんしさ野の
うけ〳〵のりとさあさ 可是 伊多
ぬきてあのはふへをおねり凡て痛み
けまそ〳〵ゆうもことなく〳〵うね
おつうひくうるひとてうおうの

〳〵んとうよ河の志てとへ〳〵

上總國歌二首 作者未詳

宇麻具多 祢呂

うちくこりねろれさてねけゆもものねもてくわきまハおそこみハうも
うゆそのねろふかりねくくみも
ふりとりのハるの日りりせん

つまくこりねろの宇麻具多れ上總心わきまハとハ吾まゝ〳〵ハし
あそこふうもしハ沙ハ記そうもやみうんさゝくめ祢
うゆそこりねるなりねろ安ふりねハ居〳〵ゝ
五原とかのハそをまりゝハしゝ笑ふねくかくふまをあ
ハ沙の都を見まり

下總國歌 署 作者未詳

3384
かつしかのまゝのてこなをまことかも
われによすちふまゝのてこなを

3385
かつしかのまゝの兒奈かありしかは
まゝのおすひになみもとゞろに

3386
にほどりのかつしかわせをにへすとも
そのかなしきをとにたてめやも

3387
あのおとせすゆかんこまもかつしかの
まゝのつきはしやまずかよはん

かつしかのまゝのてこなハ
葉集三卅九に出し女の
まゝのわたりにすみたる也
いと美女をも我によ
すると人ハ謂り假
名の義はまへに云
いへる假字の海辺埼
りしかのまゝのてこな
見安云おすひハまゝの
つぎさし玉葉鏤女子人
のけさうせしほ處
の我へ出ずとおし出
されハ此女の事ハかれ
まのほとりまて浪もうつことゝ或説おすひハ磯辺と同
磯浪もとゞろくと云人乃心をうこくすらん也
にほどりのかつしかわせ　仙覺抄かつしかハ下総國葛餝郡に鳴るのかつしかハ
と作りけるハ鳩ゐるハ水の中に入てかつくり故也かつさりに調つく
田にかへし男說見安云かつしかわせよき稲也清輔奥儀抄云かしはら
とハにほどりのにほいかくしてとりこれるわせ也へ
にハ田稲ある時や神をしる人々を集めて此新苅の稲ゆてにへとして
祭する也ある日ハ門を作てさりかの中まねさせまらひの人をもてなす事
けりすまる人をハ内へもいれねども君まてハやよせんや
とよめる也　五葉仙說奥儀抄云にて清輔の說堅世
あのをとせすゆかんこまも　仙覺抄のをとせすとハ足音せすとゆふ足を
あてふみつくれ足をうくさこゆくといひ足音やさしくをなるのと
よめるハこそし
筑波祢乃祢ろに
霞ゐハ霞すぐ也の
ぬると云か哉まで
ハ嘆息するを云ぞ
かなていきつき乃意
をねまでやかねと

常陸國歌十首　作者未詳

3388
筑波祢乃祢ろにかすみゐすきかてに
いきつくきみをゐねてやらさね

3389
いもかかといやとほそきぬつくはやま

かれぬかに（藤提）神いみりてな
筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

切ふみと（代の八陸
（ツ）
筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

（藤提）神いみりてな
筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

切ふみと（代の八陸
（ツ）
筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

（藤提）神いみりてな
筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

切ふみと（代の八陸
（ツ）
筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

（藤提）神いみりてな
筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰よかくあくわれのこころの
（可和奈久）
あきわくわれまんまんとあもひて
（安之保夜麻）
筑波禰ふうひよみゆるあはも海
のうらもさねみくまくよ
（筑波禰）（多豆）
ほのくともろおもふるか
（和我）
代もいこゆるまわのおもふ

筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

切ふみと（代の八陸
（ツ）
筑波禰乃をてもこれもにより（す）
（イニテ）
さころもとかくわろやまさき
わすくこそうあをりけをめ
（ツ）
をかくねのわろふてくるひよ
（佐波太）（余ニテ奈利）
さそふかりぬをよてんも

をしくその山けきこのゆふべふりの
本のまよはゝ同ゆの水をたづねもくよ
同ゆの水をくんさねもゝ
いもちるおさのうみのこもこう
ひけいしされのゝこゝぜん

信濃國歌詠 作者未詳

いとみまこといかゆもゝみまれ
伊志井乃を見りこともなくそうね
信濃ちはまそちよりかねふ
いのゝもゝみくけわゝ

仙口さされ志はゝ小ろ
ありまのまこゝろ
中麻奈 仙足はゝの中
乃河乃ゆまりとなる
をゝとの子ゝ志はゝ
信濃哥とゆしゝ
志ものゝゝのゝゝこき
てゝはゝ潜そりはゝ
ひのそれのうすひのゝ
確氷 和名上野の郡の
名ゝせものゝとはせゝ
りゝのはゝ郡
井 濃ゝ志 善てゆゝりゆ

小許今この叫乃杭也玉葉治道 ゝ
吳山みそゝ落つけとゝと云乃ゝ乃杭をそなゝそゝし
信濃ちるもゝもれゝのさされ志も
さゝゝゝゝくゝゝゝとひろりん
中麻奈 ありまのまこゝろ
あゝとゝゝゝゝゝゝすゝ

許麻呂氏 奈婆

上野國歌二十二首

作者未詳

ひのそれのうすひのゝとこゆる日ゝ
せものゝうてもさゝゝゝ
安我 麻左香
ゝりこひゝさ香をかゝゝさゝゝ

3407 3406 3405 3404

く思ひ給ひけるよし
何ことにいはんさまも
仙田中といふは福井也しか
小い麻むらとかきいだきする
ものなるを寄そる也
万葉多胡上野の郡の
名也此野の根称乃
麻さくらの国中す
かりめて悩ましき也

たこ乃いり野乃おくもかなしも（多胡能伊利）
かみつけのあそのまそむらかきむだき（安蘇能麻素武良）
ぬれどあかぬをあどかあがせん
かみつけのをどのたどりがかはぢにも（乎度／多杼里）
こらはあはなもひとりのみして
一云かみつけのをのゝたどりがあはぢにも（乎野乃多杼里）
せなはあはなもみる
ひとなしに

かみつけのあそれ
あそのまそむら八色
此歌勅撰名寄集にも
上野乃名所にいれ仙
是は草を刈て一抱きなるを引寄ていね寝る事とて下乃名をいひ
紐ときて寝やはもへきいかき懐きして山村中て懐きねても何のねを
わきもこはいのせんとしてあなたら草をさいはへ寄るに叶ふります

かみつけのをどれ 乎度をといふ名所也あかりは思ほゆる也 万葉
きちこ六田井乃河の内あり也きいかゝの内也くもし児呂はおいらんなり
のみまそ也 一云をのゝたどりは小野の男作りから又平度小野
ス音通れはいなりとおもひありなから之日音和く同義也
あそ寄もいふ寄らん也 一説にをのゝたどりはかは小谷也小き国ののさとく也
かみつけ乃佐野の
佐野は下の名也そこ
ちは菜乃茎立也蔓菁（和名久々多知）
拾遺集抄の名所にもよ
をりはやしは折て我
まてんとは名は妙也
かみつけのまくはし也

かみつけのさのゝくゝたちをりはやし
あれはまたんゑことしこずとも（或作弥）
かみつけのまくはしまどにあさ日さし（安佐）
まきらはしもなありつゝみれは

仙田まくはし也とは高の鉛日光さしてかの名所也見ゆまで
まくはしとはいはゝ言はいはゝ乃こめ妻は煙乃数より上は恋しむる
かみれは上つけ乃まくはし也下の妻はつけより 万葉日本紀妙義
とる之さなからつまきとをとうしてまきはしとは八目を婦しくかんゆきを

…ことの根にこもりたる心を細かに人を慕ふ心のやうにやあらむ
世にうつりかはりてもいとど歌も俗と離るるくふくやうにやとぞ
みえける 久路保乃嵐と詠めるは久安元年の頃
云葛の袴やうの小礼乃ひろきをいふ歟 久安六年
如意ヶ嶽やうの山をさうかをさうかと歌ひ
云ねりの礼と称す 上野利根郡小川郷と知るべし
河内小河と云に信濃小河ありて…
つまり信濃小河の事歟 又久安六年の子波よあふやうの
ことねく

(詞書略)
(作者名 丹波為都良 久安六年)
いりあひの乃やさうれぬそ
久安六年左京の名ぞ
名ぢく井関やう
(詞書略)
仙ーうのでい立野と云
やぬる礼ねまりて
那ろにようて
(作者名 藤原為忠 久安六年)
みえけり乃いろれ

(詞書略)
(作者名 古奈伎)
かみたけ乃伊乃保乃ぬまたひろきく
こいんそやーねとめろん
(作者名 藤原為忠 久安六年)
久安六年、こゐぞ井小川ある歟 五葉あ歟

(詞書略)
(作者名 伊波為都良)
かみたけのうやぬれいとう
いうとぬまーてのをかーてうね
(詞書略)
(作者名 於保為具尤)
くつけの伊奈乃ぬまのかりみさ
ようにろーよいこうやされ
(詞書略)
(作者名 出ッ柳本朝臣人麻呂歌集ニ)
かみたけ作野中乃ものもか
ことそとうついいふかせも
いうかせよまる。中しけかねろいも
(詞書略)
(作者名 於毛比度路)
くものうろ志川とわすれせなふも

(詞書略)
仙ーもろこしの円礼
(作者名 早苗)

をさねをするとてまりつきけるに前の柱にまりのあたりてかへりければ
我心ゆゑおもひそめてもかへりこぬまりのあだくらべ
歌合に
栗原の河原に立ちておもひ出でおもふ人をも恋ひつるかな
いづくぞよおもひ出でしは伊可保宿とかや伊香保の沼の背みえて
也有の中にしかの沖にしかの浦にしかの入江にしかの洲崎にしかの
とこ石にしかの玉藻をくまの曲にとりてしかすれどもとりてしかも
ハニ三もとにせよくこそしもし汝の助しかの沖小ひらの曲をそもこねと
みつけの信濃の
仙日こりそ高しとハ
え越ぬこしかとハ
こるしおやいさそれを
我にそうるかへと
祇日山舟橋のあき
時ハれそうるかへと
云山寺の四ハ親小き
さそれとも我にさうるかへハとりかへとりかへて

和泉 尼 可流 冀 倍

和我倍

いくかねかみつけの信野乃よろおりて
おやいさそれとわをさうるかへ
いくかねかみつけのねわりかへ
ゆふいまけともこてふかへて

いくかねかみつけの信野乃よろおりて
乃をそうるかへとそれいくかねかみつけの信野乃よろ女
伊可保風吹日吹ねと
いうかねかいふ十子を
まねと我意ハ意ねと
時うこそしいふれ
序ありとうそねと
こハとりかへねるそ
イいうそ抱乃字契小
ふまうへてそれそと
いわと月イとりさとゆ
まし晴る音通す
ふしけけのみのるの
仙日こりそ高しとハ
也我のそもく

伊可保 可是
安我古歌

いくかねかせかく同ふねねりこと
ありこれのそうことさおりりくり

伊可抱契
布路與伎

なみけけのいくかのねるよさの
ゆきすきそてぬもらへ乃あわ

下野國歌二首作者未詳

義可母

ふしけけのみのるの

許奈良能須

多賀家

やくいこそいしうみのうん

安素 河伯良

ふしけけのみのるの
蘇良由登伎奴與
うこそのれ

志なひのつけなる也こなしのすこハ小稲なすと云しハ小稲のやうに
うつくしきと云也萬葉妙義兒等(ミクハシコラ)おなしく云けつとよんで良製てりおん
この説他説倍し雅見師説ハ云く乃稲しきく小稲と云もしお為通
志もつけのあさ乃うらはとまねよとハえらりきねるよとしとハ妙字
くあつこ云乃意ハ深心うりのりてし意とのとを通ス心り心ふりなてと云

3426

陸奥國歌 三首 作者未詳

あひつねのくにをさとほみあはなはゝ
しのひにせもとひもむすはさね

あひつ祢の國を
會津根八会津の奥
列ミとさ遠乎さく
別也おいおかつくハ
逢ひなくもしのひを
さりおて筑紫なるハ
筑紫ふ在る女ふせうと紐
をむすひねと也
筑紫なる句ふ子故
兒也安云句ふ子うら
くしき也八代やうか

3427

つくしなるにほふこゆゑにみちのくの（兒）
かとりをとめのゆひしひもとく（可刀利）

3428

あたゝらのねにふすしゝのありつゝも（安太多良）
あれはいたらむねとなさりそね

陸奥ミくかわをとめ
ハ奥列乃わのせ之
何らのねふふす
安太多良根八陸奥
列と二句ハ序なり
ありても我ハ行
かんといねとなさり
そとし袮ハ妙字也
とそ何おゑハなき經
祇曰序なし云年
序き通ちよ云てかく
ましたて云文我
身と云もよくとこ

3429

譬喩歌(タトヘ)

遠江國歌一首 作者未詳

とほつあふみいなさほそえのみをつくし（伊奈佐）
あれをたのめてあさましものを（左注 あれおもしものを）

3430

駿河國歌一首 作者未詳

しだのうらをあさこぐふねはよしなしに（斯太 能宇良 布祢 與志奈之尓）
こぐらめかもよよしこさるらめ

とをつあふみとハ遠江の事也よめりいなさ細
江ハ我いのちをいなさと云にし我かかる事し仙同
萬葉古本風辞ニハあれおもしものをも
袖を分やさしきを通ス身を思ひ我を頼めて逢さ人を自由なりぬよし

さてのうへの八代おもほゆるかも

らめもよいでこぐらんとこもよの助宮くるしい池鯉鮒

舟とおもりてさてのうへの八代おもほゆるかも池鯉鮒

いりのあきの

相模國歌三首 作者未詳

いりのあきの

足柄乃安伎奈乃山

八代ゆも櫛模とこそ

ひこ舟こハ仙口ひく舟

也吉乃ひりともの

こハこやるとハ叢

吉乃ふひりめよ

こいこそくと

山一舟ひくいりの

吉まてゐ見れハ心もさえ〳〵しうふるゆきのいやしき

へてそこいこそこきりへより川迫せゞの船もやまとの

ありのわをみ山八代ゆも櫛とこそ云歟つやの本榁のまこもかる

さくすをといハん祇候心我をおもはゞくまけずともあれ

くとさくずハさけびごとわをみ山をわをとろ〳〵感して

そを喩哥をきを仙物乃安藤乃ふまハ本れ切ぶし谷うら

きとわと云ふの藤乃

祇曰歌こそ藤者山

こいそんめこてる

本ハ枝をとれる

あそれを待と渡い

り来つやあんとも

よりり神のなこ松

のなこりもしる

玉葉渡り神とつく我

ゞい叶ふれいかく並

つやあんとも安

こてるま松こ渡

かこ渡乃行さ山

上野國歌三首 作者未詳

みたけ乃安藤やまつゝら野をひろ

まものをあぜろ〳〵せん

いろ乃うひのゞりくわきねふ

ほきようも吐ま多敞

よひふくとり〳〵ハ

吉乃ふまのるやまの

うれせゞもこことゝもゝ

志良登保布

登許波

万十四ノ十八

万十四ノ十九

あせかゝしせんはゆり跡せんとゆるかまとこ磨き野よつらのそく
てこしねつとし飛鳥も君かりしゆるしまさしあさ山名不定
いかわかうゐの仙田ひとハひときを彼らかかの歌よまるなつく
に君はも飛はれまよしめよいと云ふをかけとよめるなり
播磨國風土記云萩原里土中有井息長足姫命韓國還上之時御船宿於此村一夜之間生萩根高一丈許仍名萩原即闢御井故云針間井已上 三ツ八萩也つひあかりとよふおもすこゆしらわ
ちかこ 小新田山といふ山は上野にて乃安云ちかくとそ
かこハ遠白ふ面白きを 仙田彩あきをかもる頃よ白くかれ
云しうくれせあるこハラかれすると云ことある山のちかくも裏
枝もせとこきさふかもくあとし業人の心を持とすちかくと云壁云て
みちのく行てらあちお
行てらあおち お頌そし
さハ強してさらハ反之縦
弓絃ゆつせハ強まて反
ゆるとたちゆるめハ
絃をはけめやきち

陸奥國歌一首 作者未詳

3437 みちのくのあたゝらまゆみはしきおきて
西良思馬伎
せらしめきなはつらはかめかも

そしきハ絃をはけしと
未勘國歌 此以下乃歌
不知其國乃とれなるを
當時未勘の故介云よ
にむか野よすくが嶋
にむか野 一云みつか野
國未知 かむさ乃安曇
名取ニ犯土未知
にむか野ハ弦の鳴る
いかんちかの般の名類
未考 精すらん
紀のをこ 一云わくこ
本紀 稚子 男子之通称也
ミヽ般の中父ニ云読鑒ス
すくが乃をゆま
弦鹿猪ハ伊勢也て

雜歌

未勘國謌十七首 作者未詳

3438 都武賀
にむか野に 一云みつか野よ すゞかおときこゆ
可牟思太
かむしたのとのゝなかちし 一云わくこし
とかりすらしも

3439 すゞかねの
波由馬 宇馬夜
はゆまうまやのつゝみゐの
みつをたまへないもかたゞてよ

3440 このかはにあさなあらふこ
兒
なれもあれも 一云ましもあれも
余知
よちをそ
もてるいてこたはりに

3442 3441

ゆまハうまや也日本紀ニ驛乃字をもはゆまとよめり　和名ニハ驛をむまやと
訓りそれをはむまやハ重複也　和名ニ伊勢鈴鹿郡ニ驛家有り是也
兄安云いま早馬と云也　仙田包井ニハ人馬をとゞむともおもしろくせじ
み淨の神ともいまだとゞく菴と鶴とおかて井也妹かくておもひとは
妹がうへをまもらむとなり正手也　一読 堤井也井溝し鈴鹿の驛の井みづ之有し
このうにあさ草行かて仙田よりよきてもてあはよきことありて枯
まとほくていてこそりかふといひてハ發語の頭なりすへてある頭ニ
といふや一云ちとせ也ぬとし或説ちよきてをるに云諸本ちらし
一云とほくもて
まとほくのくもゐにみゆる　　まとほくの　くもゐにみゆる
仙田まとほくのくもゐに六寶（詳）
いもがいへに　いつかいたらむ　あゆめくろこま　一云あゆめ
妹が家にいつかいたらむ　一云あゆめくろこま
こゝろくもてしあ
ゆめ黒駒　一本ニ柿本　あづまぢの　てごのよびさか
朝臣人麻呂歌集曰　こえがねて　やまにかねむも　やどりはなしに
かれゆきのてとあひ

3447 3446 3445 3444 3443

てこのよびさかハ代ニ於云あづまの百葉一本ニよびさかとよめ
讀かれ　兄安云手児乃欲妣佐賀うすゐの山とみハうつの山なども云也
いづれにてもふ詳
うらもなく　わがゆくみちに　あをやぎの
うらもなく我ゆく　はりてたてれば　ものもひいでつも
仙田のうらもなくとハ　伎波都久の　をかのくゝみら
下心もなくといふ也　われつめど　こにもみたなふ　せなとつまさね
すもぢとりて乃為ニ　物能　毛比　氐豆　都母
青柳萌生てみえる　伎波都久乃（手和）久君　美良
をみて物思ひ出つと也　みなとの　あしがなかなる
きハつくの岡くゝみら　たまこすげ　かりこわがせこ　とこのへだしに
きハつくの岡仙田常陸　いもなろが　つかふかはづの
真壁郡に在見風土記　ささらをぎ　あしとひとごと
くゝみらハ莖立する韮　河伯豆イ乞乃
やこふよの事也と　かたりよらしも
いさこもみなる書葉　くさかげの　あのなゆかむと　はりしみち
たゆきなハつめと云ニ　あのはゆかずて　あらくさだちぬ
安努イ安努努弓

3448 3449 3450 3451 3452

阿努ィ阿努婆波里可愛氐

あのしゆりすてありしくさよちね

千手くのやなしが伴
湊の草乃中に玉小
草ハ草をかめて云し見安云とこ乃へうふハ床乃へそとし玉東小草
をかこよ床り去まて湿氣をさけんへそ仆とし一説補足莚おむ乃延
いふあろう流ゆふ　妹ねろか流き経し常に将寝と　河津ィ於えと見安云
河門ハ川乃それ井しき　さちおきハさてれ菰也菰ハ草乃あまる
生六河しと人言こいそん諷詞也人こと心見とハりおしらく
をかけ乃河の茹ゆん　草陰之伯耆河のしハ都まで　ちかし　草ハ待
ろく　安素河の茹あおハ那字之我ゆんと作りし　名此我ハ中まて　お
まそし河の生うし足河しくきちぬハ美しく茹の生ミつきしィお
のしおゆんとそうし河あかわねく我しまハ次し我与此之但見安ニあのい
執也ると親とゆんと
ひ乃や　めの
花散らふ此向岑之
仙日むかつ岑ハ向ひ乃

はなちらふこのむかつをのをなのをの
ひじにつくまできみがよもがも
しろたへのころもそでをまくらがよ

雑也おるのおハ尾の上
にて二つまりて一云まま
見ゆる尾之見安云同
やうする皆也仙日
いふつまて六ハ海
中乃潮ことを云
あろく乃衣乃袖を
二句ハ袖を枕とし
又諷詞也枕香ハこり
乃陶りと読く名也
をくさ何しをくさすけ
見安云をくさか草かるなど

あまこぎくみゆなみたつなゆめ
をぐさをとをぐさずけをとしほぶねの
ならべてみればをぐさかちめり　可利ィ知馬利
さなつらのをかにあはまきかなしきが
こまはたぐともわはそともはじ
おもしろきのをばなやきそふるくさに
にひくさまじりおひはおふるかに

こし一家式ヒこハ小草うる男と小草かるわらはとおもひくらるをみれハ
ともにさてあり見ゆまゝし　去かねハ去かふ毋也こぎちて
て何ゝ称られハまふつてこい諷詞也わめかハかるめりし　仙覚抄六
草かり草かり堀山ねても知ひくちさいうり今の事分明なり

さをしかの　さとへつかはす　　岡本勘兵衛

うのゝ時はいつくやさとを立ちこえて　来ぬ人まつと　山路こゆらん

萩ちるゝ　野辺の秋風　身にしみて　うづらなくなり　深草の里

我かどの　萩ふく風の　音のみか　人の心も　あきはてぬらん

宮城野の　萩の下葉も　うつろひぬ　風のたよりを　いかゞまつらん

仙貝せりを、風の音

云〻　冊子風土記三引

おこれるを、と時ざまの

それとよみ侍る

可是

いせのうみ　あさきよりきて　ゆふなぎに　宗利

こゑよりそらに　いさりせすらし

余波　古支須麻

おそにいりあさて　こふねこゑ　いふ

都麻

ほのかにこゑね　かさそふ

可是

いせのうみ　あさきよりきて　ゆふなぎに

こゑよりそらに　いさりせすらし

相聞往來

未勘國歌、百十二首

作者未詳

可伎都揚疑

こいしけはきませわのせこやさ

宇都世等

うまにしみてそ　われもおもふ

宇都世乃

うつせのように　おもふとの

素須那

うつせのように　あをことなすな

我かどの　萩ふく風の　音しるく　吾妹子ならさらめやも　きわの秋の下

草かれかくれ　ふるさとの　野辺の秋風　身にしみて　うづらなくなり　深草の里

我かどの　萩ふく風の　音のみか　人の心も　あきはてぬらん

宮城野の　萩の下葉も　うつろひぬ　風のたよりを　いかゞまつらん

仙貝せりを、風の音

云〻　冊子風土記三引

おこれるを、と時ざまの

それとよみ侍る

可是

いせのうみ　あさきよりきて　ゆふなぎに　宗利

こゑよりそらに　いさりせすらし

余波　古支須麻

おそにいりあさて　こふねこゑ　いふ

都麻

ほのかにこゑね　かさそふ

可是

いせのうみ　あさきよりきて　ゆふなぎに

こゑよりそらに　いさりせすらし

相聞往來

未勘國歌、百十二首

作者未詳

可伎都揚疑

こいしけはきませわのせこやさ

宇都世等

うまにしみてそ　われもおもふ

宇都世乃

うつせのように　おもふとの

素須那

うつせのように　あをことなすな

つくる也 古葉よりも事の様ハきこゆる有さまなれバされとかくきこえ我を事にすまする
ことし名へよろしき也
うち日さすみや乃 仙曰宮のわかの背とハ禁中に仕ふる我世を云
古葉膝枕我を事也南 都に宮仕してある男の大和女に列てなつのわ
まを云ハしまする也
あせ乃こやとりの
仙曰なせのことハ男也 又安云名の眉(?)ハ名下也 仙曰中よりもと云はうらなへハ坂なくと云仙山坂なるハ名のれハ書様にれいもと読る也
古葉に何をおもしなくよといハ我をねなくしといふ也 二三句ハ書様の序

3457 うち日さすみやのわかせハやまと女乃（和我世 夜麻等女）
ひざまくごとにあをわすらすな

3458 あせ乃こやとりのをかぢしなかだをれ（等里 手加々和）
あをねしなくよいくづくまでに

3459 いねつけハかゝるあがてをこよひもか
とのゝわくごがとりてなげかむ

3460 たれぞこのやのとおそぶるにふなみに（多礼 於曽夫流 介布奈未）
わがせをやりていはふこの戸を（和家 家 我）

いねつけハかゝるあかてを云 いねつけハとハ職に付とハ月に疲れハとの細也
かゝるあかてハ安云に我をまた枕にすると云 花に事ならくにて我をわすれ給ふなとし
その心ハなし 宗乃心ハ殿乃子かならんまへて我をまたもし 又安云是は
このこれ屋の戸 仙曰にふなみハかぶくかと云し わかせとハ男也 古葉
我か背也 安云李に和我世とハある 仙曰にハ物忌とハ物ほかにする也 此哥の
にふなみにせこか用ゆる也 しれ物忌ありて
いつくしみて屋ふ祝る此屋の戸をあけるいとよめる也 古葉にさとさと通
あぜといへかさねに
仙曰何せと云ハ何と云也 さねハ寝るなく
まくも日暮ていふ也
する中にもおいらぬ
よるの日暮てと云也
古葉 さねなわる事ハ寛しに似ねにちかくいふ言
あしひきの山さハ人のひとさはに
ハ何はてにと云仙説に寓しよひしとの事

3461 あぜといへかさねにあはなくにまひくれて
よひなハこなにあけぬしだくる

3462 あしひきの山さハ人のひとさはに
まなといふこがあやにかなしさ

みつつ こゝの下 仙覚 こゝハ神楽ノ唱ヲ云ヘリ 然ノ意也
又けめといふもかやうにとゝ云詞 後の歌をこゝにあげ
たるにてしるへし
ぬばたまの 夜のふけゆけば 久木生る 清き川原に
千鳥しば鳴く
かくやうに 夜ふけて名ゆかしき事をも 神楽ニ唱ふる
こと 後拾遺 ぬばたまの 夜のふけゆけば 久木生る
清き川原に 千鳥しば鳴く 鶏人暁唱と朗詠ニモ入
たり 奥儀抄云 山もゐにゆめ 山乃尾と云て別ニ
あるに暁かけて雄乃尾をこえてとあるハ誤也 雄
乃尾ハ近江ニ有 此歌ハ山もゐ 後拾遺ニハ山もと
雄乃尾ハ山もゐ 山もと 共ニ雄雌別り 雄雌とこゝ
ろえたるハ誤也 六帖哥 ひるまでも 山もゐに鳴く
ほとゝぎす 夜ふけてなどか 人の恋しき 山もゐ
ハ雄乃尾ニ有 三川乃山もゐ乃ミ子乃もこゑ 夜と独
ねの 二首 ともに雄雌ニ通ス 又後乃波乃 山もゐ
乃 新勅撰 ほとゝぎす 鳴て過ぬる 山もゐ乃
声もかすかに 夜ハ更ぬとも 異苑曰山鶏愛其羽毛映水則舞 魏武帝時南方獻之 公子荅
詩 今人取大鏡 看其前山鶏 毆乱而舞不止 童蒙抄ニハ
愚案 神中抄 儀制令 説等ヲ引テ 山もゐハ鳥ニ
あらず 人ニ似たる物也 ことわりつゝ
けまじ 山寺所説ニハ海ノ中ニ有 山もゐ雄乃
長尾ノ 水ヲ 恋ル物ト云 此説ハ

うたふ ふりてきく こひきくと 山もゐ鳴く 〳〵こと 沙
ありめこゝしきく 雄すゝ 神中抄 ありつゝの 変ふ 雪こと
ゆふけ 下 こゝろ 此 こゝろ
のゝ 乃 也 宣乃
宇 ハ 也 ハ
やうに 夕 也
封 ふ
ましてこぬ
あひて 〳〵 や
いめる ハ 雄 る 也
ハ 否 凡 こと
神宇 並 名 雄
名 雄 や 名 雄 葉
て 我 さや ふ 〳〵
こと 然 思 也

出 拙本朝臣人麻呂歌集 伊来
思麻 良久
きよき 〳〵 いわ 〳〵 ゐ 〳〵 ゐ 〳〵 奈久流
北登豆麻
ひこに 乃 あせ
乃奈里
こあ 乃 や こぬ を 乃 て さあ

ふりくはねつつも　又安云いもの子よい夢（ゆめ）のごとし行をねがくは時
と云ふ（ふ）　業（ごう）ふりくはねつつも　並（なら）ぶもんと　ふりかふりちくん
えくわをねをもふりぬるとふりくいふりくく
いとにはすとわがせろひと　おせろをいりんとこほろそんをいりんとこ　醫
あ〜絶（たえ）といふてそんをまろいりんそしてえまろいりて　張のさねをうりて　ふ
ふしまろかやせんとこ　ふりん乃父人のやうみしてえまろ（ふ）ふせんと（を）
れろも張（ふ）　ふりも
さのやまたうつや　左馬允やさぬやま
八千代おかいさねも
濱波こそ成（なり）三（み）さの
山を山とこ仙日もあること
とい谷乃声（こえ）ごとふ
ふもはをくふもかふ
ゆうふてふといゆうより山乃尾ふりてつとふ巣ねふこ
ろこいねんこり妹がと　一二の句いをくふもいこん汎海
うふけりふとふ　又安云竹を植る時い本末乃うふうふ（ふ）巣ふけの

ふもを汎海りまくふりの多動（ふこ）さ（を）くゆいいつちうりいて
雅（が）を並ぶんとこふとふいふとふをお音（ね）通（ふ）されい人（ゆ）ふ
こいつふくふんとされこゆふやる
かこれりさみをゆいりひたも
うへこおいわねふこみふもふこつの
野猪（ゐのしし）金敷（かなしき）くゆうふる
のうふのゆけいこみつうふも
わもりふみもこえゆ
うへこおいわねよこふ
うへいしへりふこえふこ
ふい女こねよふ
あもとい我ゆ並ん
こえこイ本わのゆも同ふちて仙ーこつふりのうふへゆけふこ
月ふて（ゆ）と成ゆ並ふ並うふんこよりふのうとい中ふ玉巣ねの
並ふし同ふこふ月の中ゆ経ゆけいこふこみうふふいふりふん

和歌（わか）
奴（ぬ）

一云のうへゆけこわのうゆの
ねれゆちりてこのちいさこてていふ
あれそこひんなのちいねひねとも

こりずまふこなのうらにやくしほの
故素
かひなきこともおもひつくとも

あそのかはなみたちにきといふなれ
安可美 夜麻

かひやまもこえてゆくらむ
可比夜麻

あをねのうへにしらゆきはふる

おもひあまりいもがりゆけばともしび
安刺枝 佐介 比

のあかしのうらかぜぞふく

ふるさとのいはねのまつをこえてきて
佐介 比

いくよかへぬるあかしがた

ふるさとのいはねのまつをこえてきて
佐介 比

いくよかへぬるあかしがた

此一首見二柿本朝臣人麻呂歌集一上已記也

ふるさとのいはねのまつをこえてきて
可良許呂毛 須蘇 宇知可倍

いくよかへぬるあかしがた

ふるさとのいはねのまつをこえてきて
氣思古 已許呂

いくよかへぬるあかしがた

一云ふるさとのいはねのまつをこえてきて
安我 須素 宇知可比

いくよかへぬるあかしがた

右件歌

右件歌者神社忌寸老麻呂之妻玉匣
櫛笥乃奥乃真玉乃
安刺枝 佐介 比

いつしかもあけてをみむと
佐介 比

おもへかもわがたまくしげ
於毛倍 可母

ふたあけてねむ
布多

玉匣
櫛笥乃奥乃真玉乃
安刺枝 佐介 比

いつしかもあけてをみむと
佐介 比

おもへかもわがたまくしげ
於毛倍 可母

ふたあけてねむ
布多

右件歌者神社忌寸老麻呂之妻玉匣
櫛笥乃奥乃真玉乃
安刺枝 佐介 比

いつしかもあけてをみむと
佐介 比

おもへかもわがたまくしげ
於毛倍 可母

ふたあけてねむ
布多

右件歌者神社忌寸老麻呂之妻玉匣
櫛笥乃奥乃真玉乃
安刺枝 佐介 比

いつしかもあけてをみむと
佐介 比

おもへかもわがたまくしげ
於毛倍 可母

ふたあけてねむ
布多

右件歌者神社忌寸老麻呂之妻玉匣
櫛笥乃奥乃真玉乃
安刺枝 佐介 比

いつしかもあけてをみむと
佐介 比

おもへかもわがたまくしげ
於毛倍 可母

ふたあけてねむ
布多

右件歌者神社忌寸老麻呂之妻玉匣

…ばあきさぬ秋ぬいもくうもし兄妻ますのうちへいねや　五十四
けきぬいけりねこと思せこ他兄いをとる心さしこいつまも繁妻ゆや
一云ますうちうちりそもますのおちひやてあっちへいといん祖父あい
あっとは逢ねことやも祖父のりみい兄妻ねもりねしこうちこと
うち風ふい事痛うちうちへおみ出ます祖父妻事うそいてるやこと云
い赤紐解れ波やいつそねいわるまねりふこちへ後きるも
ひることけいとけまへ　比流
せおを物衣ちと解　狭流
うけを後へいは
とけもらけあい紐
とけるいせこふありる　遠妻　布須尤
へうさそうをけかみとさにますう
安須伎西依来也　手騰詩
あすきせやめいさへいねこうり
麻苧を苧剥ふ当ハ地ふ苧剥ふ苧剥ふ痛へ
兄妻ふすきいせをうけをへこうりあすきせざめやいねこと
せさめやへいさへこいい他男いさへくきいねをうけてうくこと

きうくきへ一説ふきこいは　伊安
ほへまこちふおうふいもをうけみのね
勉太刀ハ刃うち添こいん　祖父
祖父お伯　妻
うけみねこいめうけ急ふねへ
てこいちごこ伊の妻
うふ妹をめうけ急ふ
うけて兄ちねねこと
ねをちへくこと一説てこ
かへへもを来ふ妻
兄妻ふゆうちへすきこいうけ男ふ妻を無ふ妻ふところおいい後方男へ栗如
男へあへくけ妹ふこゆうけはふきけ度を并いうへ妻ふ弟うますいい
はふ無へふふ妻ふけうけ男のけへうふれ持へ妻とつけへうみと
けうつさうふまふをふきふ他兄妹の弓ふいは金あるをいはずふ伯ふを云
とていへ重んとる祖父伯へま打垂ますもおきをねへちり
みことうそもふ祖母兄妻云けへすうこいけへのこうくうとふ

伊安
ほへまこちふおうふいもをうけみのね
契
ねをうまきこうるてこふあへまへか
由豆加奈倍麻佐毛許呂乎
なへいもをいほりちへまきこころなの
伊麻可多麻斯
こうへいやけこうしか
可久須泥曽
けうつさうふまふをふきふ他兄妹の弓ふいは金あるをいはずふ伯ふを云
宿莫郷那里於久可奴加奴
とていへ重んとる祖父伯へま打垂ますもおきをねへちり
みことうそもふ祖母兄妻云けへすうこいけへのこうくうとふ

3491 3490 3489 3488

玉東ねあくあり〳〵しハ師説称さゝけりしとあるへしあとさうと同意
見安又云物くるりねくハ猪を薦るとりて玉東ちゝんするもの
こゝろにとのゆるかねさとりねきくけりしとしるとねさせ也ら
ようて一首の一

おふ志もとこのもとやまのましばにも
のらぬいもがなかたにいでんかも

おゝ志もとこのもと山ハ仙臼村ふ志もとくハ笞チ笞也丑ひ妻乃ゆうを笞あとし志もと同ハこも玉東にてそねいもか名もしらるゝ也出へし

あつさゆみよらのやまへのしげかくに
いもろをたてゝさねどはらふも

こと詩るゝ也玉東ならとしハ山ハ猪あ追ふ也志宗と同ゆし也や笞蹄二ハ罷人を持まてうつ羊ゆ又順和名云

あつさゆみすゑはよりねむまさかこそ
ひとめをおほみなをはしにおけれ

唐令曰笞大頭二分小頭一分半ニ　但師説ニハ同つ志もとしハ笞罷の

柿本朝臣人麻呂歌集ニ出

志もとハ荏々日本紀十四推畧紀云近江蚊屋野猪鹿多有其擧脚如弱木林　畧記弱木を志もとよむ也志もとしハこのもと山の訓詞にて
こハ木の字にて志もとしこれと木の本山乃志宗をみけて志らみもとしといふ

楊奈疑

やなぎこそきればはえすれよのひとの
こひにしなんをいかにせよとぞ

比等

半夜麻
やまのいけのにごりにみそさざい
尤須 揚奈疑
ありとなくすもまもりいも
をうえもなをこそうえめしつつの
四比 故夜提 多来波自
ちりかこやてんてうあいそーうう

一云ともまもりもん
思比 佐要大
しつおれちりかさえつのさき
そすくこと

こともちこそうつる
子持山主来和 ゐのうる
て蛾を楓紅似蛾を故二
冠本ゝれもこわいとふ
おいのとっとっとい
移んと移いつめいい
うつつ主薬多
楓のもみそいく
ちくわんこちと
いとおろかうついの
うい傍乃宝巌
乃うい心を安二巌の
つきうううとおくととい心ともちくことやゝしつ里東わつれを
おとうてれのかもかこれまおそねこと仙説鑿て雅
しちうつのこいか 楠のさえれ兄安云楠のうるくいこのさえを云

兜毛 和夜麻 和可加激流氏
こともちやまわつやてるてのとみつまそ
宿毛 和波 汝波
ねともわそりあいあいるるふ
伊波保呂 蕊比 和可麻都
いとうおろかういのわつまつかさかこや
宇良 毛等 奈久 文
さみのさまさぬうくととちくと
多知 婆奈 古婆 波 奈利
ーちちまちかこいのそおわつかねいまん
こうろうつくいでおれいいろふ
可波加多 安也尓 阿良奈
かとうみのねろーうやつやかく
已登 毛
さねくてこうこと小てまーの
ちうつのこいか 楠のさえれ兄安云楠のうるくいこのさえを云

なりとハ女房おさあきを召し重宝うつちんやうつうこハあんとてふと心そありうつゝうつくしきをいてく我いゆうちんこゝをかみのねさろるかや 祇園ふあゝられて根ねさゝれてそこゝいかやうちふにそよりてゝもとうかわるこゝをようてよかり物質札中らひもされくてむつこゝちろさゝふろうみるゝかやかくいかやふ亭くゝこゝろやの浪あやゝくの浪 畳注 仙台 伊勢 安芸 おねてこうゝこハ書ふ重ねいかゝ重宝ふ浪ねくのろこそ安浪てゝ浪ふもさゝふ小ふやゝくふねくのろこそ安浪

うおりくゝ乃根やりくこゝふやこゝ乃

浦安やゝ又ハ集ニ三字乃原こゝ三ふるうこの重ん乃安ふね

やりく小萬根の和りやゝる重ん重東一二

の句ハ数句ハ一ゝこゝん浪ゝこゝ人おりまゝふゝまゝすゝまゝすゝまゝ

うおりくゝ乃根やりくこゝふやこゝ乃

きそもわすそやれふするれやとりふよをそうつるうやさねうやの

和我 可流和夜 佐称 撒奈 香四

まゝともおこやハねろこゝちうし

平可

平良佐伎

もゝさゝい根をうもりつるひのこれ

林 遠撒

うくゝふあしけをねとふゝくよ

安波平呂 多波美豆良

あはそろ乃をろ田ふおりるよふみつ

和我月ゝ豆麻

いりそぬるくゝあをことなるん

わっめ乃ひとゝさこれとのさゝふ乃

おりふしめいぼくをこけねのねしし根と称とを對て詩作儒者前

うつしこころわをさうる和漢
安齊可我多
ものさうるひとのゆふかちまつハ

あはをうたのこゝろ

仙田あいさつのことば

うけつのをなのいろはにめやと
東風そめや

このふたうたハ古今活用の基本なるをもつて
以おはをうたの心もて詩うたの題号を
みてハ二枝草也いひぬるくちをこゝろみてこゝろ
まるく我と言おもふとも一説云やまの田小田しさみてハ妹娚もふかく
わの月はよ人いさゝれこ又安云わの月はゆとハ月出をよめる人をさす
素めまよまれよ月我月又さめ事書しあさうらいねの旅
こせうさゝこゝろいまさゝこゝろこゝ月音仙田哥の心ハ
人ハ制すれとも多ふ袖をさゝる旅しせのあらうるさゝたうこく
乃をとへめくゆるくわいうるをとうこゝろめるを
うさうるゝうちひの哥枝我三乃ひのゆふいうるうちを
ゆふふりくる糸出ゝ袖を切ふゝみ故る糸出と木乃七風流

さうくしき夜の素
一二乃月ハうつ安ふ
いうん風月夜の素ハ
いふなる心ハ古をこ
い心安くめる哥乃と
うちひさすハ枕詞に
宮乃敷いふ勤教也
ふうつさ若し教
乃の嫗てこひのみ
逢くやめんと語る
序哥也さうふいる
妹をゆりてもひや心
ふねもろ乃ことをふ
彩雲にけてしき
家こゝろきゝ今時
山ばとハふと同さ

布治宇良葉
夜
紀呂
若夜能瀬河伯
渋木須河伎
伎義
多麻可豆良
已詩呂
和我
招都古奥佐
ヒバツキ

さうくしき夜の素
一二乃月ハうつ安ふ
いうん風月夜の素ハ
いふなる心ハ古をこ
い心安くめる哥乃と
うちひさすハ枕詞に
宮乃敷いふ勤教也
ふうつさ若し教
乃の嫗てこひのみ
逢くやめんと語る
序哥也さうふいる
妹をゆりてもひや心
ふねもろ乃ことをふ
彩雲にけてしき
家こゝろきゝ今時
山ばとハふと同さ

布治宇良葉
夜
紀呂
若夜能瀬河伯
渋木須河伎
伎義
多麻可豆良
已詩呂
和我
招都古奥佐
ヒバツキ

さうくしき夜の素
一二乃月ハうつ安ふ
いうん風月夜の素ハ
いふなる心ハ古をこ
い心安くめる哥乃と
うちひさすハ枕詞に
宮乃敷いふ勤教也
ふうつさ若し教
乃の嫗てこひのみ
逢くやめんと語る
序哥也さうふいる
妹をゆりてもひや心
ふねもろ乃ことをふ
彩雲にけてしき
家こゝろきゝ今時
山ばとハふと同さ

布治宇良葉
夜
紀呂
若夜能瀬河伯
渋木須河伎
伎義
多麻可豆良
已詩呂
和我
招都古奥佐
ヒバツキ

落拓よ出 あこハ世よ要りそりけりよ吾心ハ豪家よ
通ち人乃私を乃ほよ物ぢてそこねを歎く心何今時を私こと
さするめ芸落の極る分そし彩雲よりて云語かハ出し日本紀ハ
谷せこそ今こねハ 世ハ路よ常なきまくハ つるぎ乃太刀と人みとり乃愛
芝分れ今うてさき 八千ほり相撲こそ根ハ小草こハ徒なる
也乃安云村のやうる草こそめりいまだ久く白き乃序奇小説ハ
くみと雪ふり出 宿奈磨
仙ふくみとまこと 妙ちる金ハ白きを
ふてこと乃ハ ころもきり乃あるこそえて
れハきこと云ハ 君母 実布
うく金こを乃 許等行比
ころのをうまれこハ子
等の落ス久ス 物能平曽イとのおそ
よりおやりふうこれころ
ひこ初るよいるるものうのひねるよ
いさよふくものよりけほよそし 多可林 毛比 氏
ゆゆされハみやまをさぬハのくるめ 安 是可
あせっそんこいひこころそも 久毛 能都久能須
しくきねハふくものけくめるわゆまへハ 多可林 毛比 氏
きみよけきあくしのおと 阿我 於毛 之太 久ハ波布利
ゆうなものわそりんきふハふよりり

あをねろハこくものさとハ
物能平曽イとのおそ
よりおやりふうこれころ
ひこ初るよいるるものうのひねるよ
いさよふくものよりけほよそし 多可林 毛比 氏
ゆゆされハみやまをさぬハのくるめ 安 是可
あせっそんこいひこころそも 久毛 能都久能須
しくきねハふくものけくめるわゆまへハ 多可林 毛比 氏
きみよけきあくしのおと 阿我 於毛 之太 久ハ波布利
ゆうなものわそりんきふハふよりり

みそうゆくやこやも 走湯うちをれおくゆをこひくよめうこ
あをねろの棚ひく
き根呂六ふをき根嶽
せいさとハハこそ
くやのこうふをそ
みて初ハこそ
こそ 物能平曽 ハ物と我ふふ 但宇 ハ物と我ふふ
ひとねろよいるる物う
一巻にそくりう利
りうみき根よこよ
小やのようるこそく利
斗ゆもあうす方こ三
よる書ハ根めとそ
よりり書ハよる書こ
ゆされハみやまを

小の屯 八屯沸粉仙粉二
しおねそとそのて
ぬて 日音日爰をそして 八屯云ぬ屯 み北ムり立 仙粉二八布を引てやうか
白さ屯ちや布をかめてりみす山半北始能波根乃雷ももこてつ前二
釋スニ久ふみ山をまねやをうた付ておくの好んさみ雪いいし
しゆき根よ屯乃つくのすり又安屯乃付し玉来のすいちすく心ら根小屯乃
付しやをすをうく我さ二安ふ付久安をち根とそひくとこのすや虹と能
乃ひかちも乃これん 又安云ひりかちものハ科面気のくこれん玉てハこん
ひまや也ちもりハ屯をこてわてしるしすもほちもなやそとこ余玉来
我付をこん降りハ屯をこてわちて安ふ立屯をそう安ひのくこと担ひ
出くこうすやそとて
對てのわいちてと
八屯れ粉ひまれ粉對
玉安ちやうくんの祢乃方と
るせ安ちやそ又安ス

可半能
ひん乃祢名ふくことあり
そハちてとあるふ
くんのねるこよむやも
しことハ下屯とねる
る屯し對馬の根小そ
下ねる屯しおふ
ふ上乃根の屯をえ
く安ひちんとし
うて屯のしてふ妹
能ゆそろハさる心音遍すれ心こハくるけ。ハこら能てさ
也白屯ハ祢ふてこいん祝心四ハ中祢一妹をけてさいあるこ心り
加るくうこうそ祢きこと。るハさいかうとりいる
いそのへよ、くる屯のいいそ乃うふ加る屯のいい砂安心又安云加ねよつ
くハ沿り屯の付し人うねうよこハ添口小人のをひろけてきてと云
口し要安乃上り急る屯の添小付おくふ人乃口小そひみすふいさこ身
み礼祢さめるさくそハ砂安武祝とうハとやしねやく造らんこと

許已婆可那之家。
可努麻豆久
伊射祢之賣乃良
和伎毋紀
波仕
於多波布
阿是西さ呂等

[illegible] 兄安云汝が母にころされて [illegible]

[illegible] よめる [illegible]

[illegible] 諷母 [illegible]

妹 [illegible] よめるなり

3520

おもかたのわすれんしだは　おほのろに（於抱野呂）　たなびくくもを見つゝしのばむ

兄安云 [illegible]

也おもかたの [illegible] 大野 [illegible]

東 [illegible]

[illegible] 大形 [illegible]

但 [illegible] 我 [illegible]

3521

からす（可良須）とふ　おほをそどり（於保乎曽杼里）の　まさでにも　きまさぬきみを　ころくとぞなく

かくすとふ [illegible]

同音 鳥 [illegible] 大食 [illegible]

[illegible]

但 [illegible] 鳥を [illegible]

[illegible]

こゝと云 [illegible]

こゝとなくとこゝろ [illegible] 仙覚 [illegible]

3522

きそこそは　ころ（児呂）とさねしか　くものうへゆ　なきゆくたづ（多豆）の　まとほくおもほゆ

[illegible] 仙覚 [illegible]

兄安云 [illegible]

[illegible] 向 [illegible]

東 [illegible]

3523

さかこえて　あべ（アベ）のたのもに　ゐるたづ（多豆）の　とも（等毛）しき（思吉）きみは　あすさへもがも

[illegible] 仙覚 [illegible]

駿河 [illegible]

[illegible]

3524

まをごもの　ふのまちかくて（可久氏）　あはなへば　おきつまかも（於吉都麻可母）の　なげきぞあが（安我）する

[illegible] 東 [illegible]

3525

みくゝの（水久君）に　かものはほのす（抱能須）　ころがうへに　ことをろはへて（許等乎呂波敝而）　いまだねなふも（宿奈布母）

[illegible] 云說 [illegible]

まをこもの乃ふのみちく　童蒙抄云まをこもとハまこもを
ハれことハかりみふ所てしき也ねハまをこもとハかりをかきくよりよ
めるもの又安云なまこもハ沖ふ有る時ハ仙口ふ有ハまこもの風
うつくおもれいもの乃ちかくハ思をもくくてなきわれハ歎きう
わすれもよふそ　玉栄云乃ハ爰にも七ふをよくいひとゝめ
其の程きハ乃ふ合ねハかりそふぐといへん　訓河よめる二乃句ハあそか
へぐそ也ねハ心下ふハ沖乃時の事ともをかきといへん訓河よりみて
おそれハ歎きう我うすることゝ云心
みつ野うら　叡山ハ水久乃野ふ心ものねなのとハ
時の初をのくてゐめく心　仙口ハのすハゐのめのすハ時くふ
まハそつ野をよふくよりまこものよふものねこゝをとハをのくひ
くふ安云訓河ハこゝをまふそて言を延てこゝをのくひくえ
すもとろハ沖なくふのめく時上まこゝろひくりて未　神ありくこゝ
ぬまと一つ加ふ多くを　等里我摘すす
乃安云二沼ふ多の叡山ハ　玉栄ハ
ふもと

こハ遍すハ多くするこゝろくをもとゝハ二方ふ行ふんとゝかよりうねハをゐれ
うとハ沼二ふ多ハくるとも我心ハ二方ふ行んとハるゝそれうこと
おきてよすともをの乃安云沖ふすもと時ともろハこゝろくふ
さくふハ八坂をこえてゆく多ハ仙口ふ有る笹りれハ時乃ふ
ようまるまこまこゝろひ

おきふすもと　平加毗
ともの　也尤可
ところやさうう
きけくいもををきくきぬる
水都等利
みつうりくんよろひふいものふ
ものこすまをしおりひもつこと
等夜
こゝ乃野よをさゝ　波伴
林
ねあへこゝろ
尤平思鹿
さをきのふをやそもそすも
兒呂　可奈門
ころろ　ようくえこと
伊毗
いもをこゝろいひふこゝろよひさの
興許夜麻敝呂　思之
ようこゝまへろ乃きてあすおりる

3532 3533 3534 3535

なるのはいとこいとん諷詠しよういはよりかなしきこものは妹
せなのは助字也旅立つきよりかなしく思ひつゝ恋ひつきて
のかりはかりきこえしと或説いものゝは妹なることこれもこゝろ一ッ所不好
これらはとさきなりけり　春の野は百首孫仲の哥にも春
野こそ下不知をさきなりけり
〔上〕守株待兎をまちいつゝ兎をねつ出たるを見つけたる者
こいとん諷詠よ一二のるはよめりときくは清定乃也治にねあ〈手拔
かちかこゝろへは思ふもしね牧女よゆへ〈み也り極しとこゝろ
〈はきこりし也乃安三は尾済りしゝ前る者といひ行るおもいさるまじ
さとしのかすかし　乃安三こゝろかすていころの也女をおもひ也よと金
戸口膳しきて也ゆくしえてしいりかよしと云也ゆくしのしは助
字也まかて鹿のかしと兄しまもし女のよしかりかはこゝろにかよひてまたき
こもをこゝろあいとに　乃安三おもいさは眉引也横さ雨のみとつくる
也ありはすいつるとは鹿乃やうかくれたるまゝ也萬葉妹を多布人
かまうても　横山なれ乃鹿乃やうかに隠れぬと信くよめる也
山なるのらは助字也一語ありとすいつるは鹿の静かに心を痛むといひせるを

はる野よくさはむこまのくちやまず

あをしのふらむいへのころはも

ひとのこのかなしけしだは はまをどり

あなゆむこまのをしけくもなし

人のこれ也けしたは
浜乃例よ行る鳥は踏まもゆくもさのみけあまりねは行なやむ
こいとん諷詠に行なやむ駒は足なやむてなし人乃女子のかなしくいと
わりこゝろあまり東の父母よ　わが故しくてのる駒の足なやむも惜
むまして女子は惜し
きものなしあは惜し
くもなし

はやしまねもとくり
一二のるは廣しと云乃
くものは小さきむ

あかこまがかどでをしつついでかてに

せしをみたてしいへのこらはも

とよき君はよろしくいかにもまほしくて
くもなしとしとし惜しけは惜しきさしきとけと月ありしまいはるのを
ありこゝろあかしてを
根刈乃門出をみ別りて
く出でゝ餞せしを
女も名残惜しみけり
不らく立行しか餞を送

おのがをを おほになおもひそ にはにたち

たかに不なつかしいふかつまとも

（古麻）
あをすゝ我りくるまのあふさきに
（尤手挑吉已許呂挑吉）
ゐでこねをひさしてさをひきこえそ
（和我理）
いつもるせまのわがりこんとよ
（久嗽胡之 武藝 波吠 古宇馬）
くへふむさをしこうまれそうく
あひろこしあやかりも
（宇麻 敷胡之）
一云うまぜこもこれ
（仁 必乃 波太 布礼志）
そつくふまるまでいこも
なりし

（ヒニシケニ）
出せい牛乃宇ちくるとのゝ因子鷲ハ十二町小ゐゆまりを
拾こゝ小牛をい牛といえれも人乃ゐれりとを知ゐと四束許綿云
乃哥をひろりゆ川ゐ哥もちるし意憂ねふいるゐ但哥の心ハ本
文三毛心及ゐ小馬の拾こゝ小妻をいゝゆまりくるもあすこゝろ
そつちくゐまと風俗ふよてそつくふまりくのあゐゆまりくふいとゆまり
ここ一云うまぜいまぜこまぜをうまとそりゐまりくる
いろりをうまとそ
（波之 宇馬）
（ヒロハシ）
葛橋一いろハりの乃
（伊毛）
子ぶ拾すぐの細き指ハ
ゆちくのこ須りて馬し
こゝぐゝまを心のゝ妹
ろりやりてさいんろて
拾る一二の包しわいて
小ちくハ我いてふゐるとの心一云小妹ハ弖を弛くせし弖ハ妹を弛り
入くゝ我ハ初かをれ
てりつまやうるまさ
（安受）
あすのうへ（古馬）よこ二のをしてそ（安良祁可等）

いこけるところを（伊吉）いまにうのする
さわりもりてこふいはまあいあうこのの
うまもとやみこうてつすさぬ（手兒）
あすうこのゆこのすあやいこ（安良由胡能須安也流乃文）
いとにゐるところをまゆりせうこ（麻由可西良布毛）
さぶれいかこのをもさせて心いこみ（已許呂）
あうふいしりいへりあうもりも
ちりいあまりつきを駒の足うくるを家もとにて独宿こ
あすうこのゆこのすあやいこ（安良由胡能須安也流乃文）
いとにゐるところをまゆりせうこ（麻由可西良布毛）
さぶれいかこのをもさせて心いこみ（已許呂）
あうふいしりいへりあうもりも
ちりいあまりつきを駒の足うくるを家もとにて独宿こ
あすうこのゆこのすあやいこ（安良由胡能須安也流乃文）
いとにゐるところをまゆりせうこ（麻由可西良布毛）
さぶれいかこのをもさせて心いこみ（已許呂）
あうふいしりいへりあうもりも
ちりいあまりつきを駒の足うくるを家もとにて独宿こ

家乃佐可里山乃くり佐するまやさて心いこみ（武蔵我夜都留都遠美）
むろくやりはれつみ
都留乃波礼つみのきりねふ（阿須可河伯）
ころいつこもいまるねるくり
佐すろ川とふこれるとまてして
せるくとみてりさねくくやも
あるろかくせくこまりせいのまうさも（安須可）
いねくこまりせくこまりせそ（安平楊木）
うをやまのそろくろうとしてあとまと
せそといくまとこちこまるくまうす
うすりのそれ下濁れるを
せるくい世るし下濁るのそろくろを
まてくせまとこてくれて橋と

あすの川すくと知せハ　我名のいせをとゝろん訓猶しりく制ぜうくまでと
きくハいつ事もねくまでをいわつるくせうく逃さをまでいつまで
つのをやきのりくろ仙台をかのうしろ出くる木同を作るくるまでそこ
石宴会を待しことせんとうまでとハまずをこ変もあれこ只
せかこハ放ずくく川とこに我こうちくすも波をまでそしこあいせうまと以ふ
つすくとくせかいさこ　阿遥　伊利　須沙　許婆理沼
つのちかすむすさのハ　美受
すさのハにはまこ
沼ハ沼乃あ隈りし
ま
ることハ仙台をそして
久まふ嘆ま
をまんぬかそこ
あるせろよまろ乃
石宴をまるせろハ
乃あるかこまろの
てハそさくこ玉来かまりけせろハやりふ男しけとき日こ人さよす
とこハ仙台人さへ我吹するとこととこの隈まる時狐も吹てお依
ちきにいさくふ男放独おて我さへ我吹するとこ一説云まるせ
ろハいけ波のまる玉きつハまつこまいまの校未繁なのの
ふ流れよるをこしよすまつこれよるやうふりてこ
四ハまる隈よまつこれよるやうよふ男よまれさくよるこ
さのしりこ怪今ちこのりこ我おの名所こ石宴ハいつはりもいろよ
まふくこ最一二るハ波我こ怪今ちわるとふ海るとりまつけくく我
手ふ男ハつ海りきのまろんとしわりかハ称りも
刈ていまといわつはね
柳ていねまと眠まも
ハりねくこ石宴波
のかハ波のまれ所そ
まこまきひとかそ
ハ所る独狩こ素ハ
こみくこよハてく

於志区　伊奈等
たていまとこれねハりねと波のれ
伊多支良　思毛與　比登里宿而
阿遥可麻　左久　奈美比良湍
あちかまれりふさくまみひせみ
ひとくくものかあけをそ

みるひとも袖をしぼりかねつべし
おもひたつ日はかつがつまつ浪の
うちつけまろか 阿遅可麻乃浦名也 さく波乃安
つちやまれまろか 満乃安平乃名也 風波乃心こそ
波乃花咲心こそ
まつうらかさわ 沈和恵宇良 大知麻比等 其等
わたのはら八十島かけて漕出ると
人にはつけよ 於毛把 須奈 母呂 和賀母把乃 須
おとにきく 許氏 受久毛
こてしこすくろ 可家 水奈乃
うちよせてみるめもかるる 玉もかる
人もすさめぬ 水都 木都
あまもすなれて 麻久良我 許我
まつとしきかは 丸宿
なにおはねとも 那平将可母 思此
いとこやとまり 奈夜麻思家
おやもけひとしもよこやね乃
ひとりしぬれは 伊夜母比 麻須 介
ねやとひとしもよこやね乃
ひとりしぬれは

かこいまつてもる妹かこと
やまとへとゆく潮乃とにかくに
いもかめる家の前
家つとにせん
おももりやる
妹乃家よへてかよ
まつとしのかこと乃
兄安云花者乃こま思
師浜花者乃こま思
ふし八定めぬこと乃
風乃下紐とけねよ
女ゆゑ世の音もくち
こそこその序
兄安云毛をうつ小垂くい用小こそ
```
```

乃風ふくし又安云おとろしくせんさいはひさりせんの空仙日さね
ふきいへ人ことたのしくこれそよいものさくいつさへ
あやまりけん人ひねりもよあやまりき人あやまつる
ハ舟出すくゆきし人をうらやまむやよ兵れいせあてほふそひやすと云
あそすてゆふ 麻久良我
枕香乃許賀おほこう
乃阿りをうく舟を云
哥乃心ハ阿盃さ抜
る加人乃ゝ舟ゝ安て
ゆくを賀ほて安ゝ山
舟出よりて盃ゝ
おゝ舟を〳〵ゆもゆも
又安云こうの里人ハ
ようの里人心玉葉舟
の堀つお処ゝおか困りるを添てよくおゝ固めてしお人ひ形をさん
ゝりねゝゝゝみの仙日中金ゝハ鉄ゝく舟布ハおの名城ゝ迫

許賀 こう
あそすてゆふおゝりんまゝりれ
れゝみねをへゆもそしゆもかゝめて
許賀 こう乃さとひとつゝハさめりも
まりねゝくみゝ乃まりほのゝろかゝ
いそちくのこゝろつゝくハ

万十四ノ 四十二

可奈乃 加ま平
かおそてとたりまこのみひりとれて 北賀乃礼 奈良
あめをまゝのすきゝをこゝまりく。 能須 等麻 乃舟
ゝのまりやよりるーゆもゝりるひき
ひとりやめんあをやちりて 伊藤 和可米
比多我多
ひりこゝ戸ゝうのゝりゝのゝちゝえ 多知 美 太要
わそのまりあとしきそゝもこよひも

まりわゝ真蘇芳ゝ赤土をゝ舟生ゝハまりりとけてるふ出その風ず
おおとてをりりさ
金門出ハ門出ゝなりり
りさまりりハ芸まあり
也ひりさ里ハとひきと
れいゝ仙法ゝ時法の
らゆまさまりハいりて
里ハとゝん風ゝ
あめをまゝのすゝハ
あをまりあすゝ虫と
云我ゝ用ゝきみを
ゝゆもゝハ又安云あ
みゝハ君をゝくめんの心玉葉ゝ哥ハ逸り人乃ゝおを特て門出
乃神とゝ祭れいあをれりをそ君をゝゆもゝくゝとハ助宝
りのまりれにみる 玉敷ゝや神ゝハ二乃名ハれあひきれ枕詞
我をまりねゝくいりやあひさみりたゝんそ

ひさかたの雨は降りしく
古歌 氣品
ものゆゑに思ひそわをる
安騰 須酒希
ひさかたの雨は降りしく
宇良
ものゆゑに思ひそわをる
かきつけごろをおりひすこさん

あしひきの山鳥の尾の
都久
しだり尾のながながし夜を
宇良乃野
ひとりかも寝む

わきもこにあふ坂山のほととぎす
曽和敬可毛
わがこひまさるあふ時までは

加来
かみつおせんこころもとすて

あしひきの山鳥の尾の
サキモリ
防人歌

未勘國歌五首

防人者註釋曰勒負
職左右衛門司之
ゝる者凡ゝ集ひの時
おのゝ
うちひてこゝ愛か
諸國の防人等の中
或ハ五位六位の
る或ハ庶民乃一名とゝ
矢り持ゝる物を統率して
也同其ゝの時ハ
つきもこゝあふ坂山ハ
さゝこゑをかきりみるゝ邪神しるゝ
哥乃心ハ吾妹子に我ハ
也但物勘乃ゝ
あゝ心なり

於伎
おきそくいかいもいはまもるしともゆく
あつさ乃弓はりつゝのもつし

古歌 伊可婆
たまそくいかいもいはまもるしともゆく
あつさ乃弓はりつゝのもつし

防人歌

防人者註釋曰勒負
職左右衛門司之
ゝる者凡ゝ集ひの時
おのゝ
うちひてこゝ愛か
諸國の防人等の中
或ハ五位六位の
る或ハ庶民乃一名とゝ
矢り持ゝる物を統率して
也同其ゝの時ハ

娘子とおりへのことく 重而 かくまるいかくめる 心ゆる 我れ共 ひ
行ひきの山のうくけ 名安云ふ 宗内 来をすまるはうくる
重来 宗内 りえぬ事 を 重ねて 行ひきを 我いえて
ま二人を 待ちえすして 指帰 宗人 歌く心 宗の上そて 喩し 仙況に 例の
鑒そ 雑歌 平城カ 波奈多知波奈
をさとちる 君待を 波奈多知波奈 ひきちちて
なさとい小里し小乃 宇心ち 小野小山の 可敞 我波奈
おく里乃 垂穂を 可保我波奈
ゐて人小比てしま 諸繍
みてえらくと 挽歌 可敞
みやこ乃方すくみ 寧楽自邑 可保我波奈
おき風休ふ 古奈宜 我波奈
へなくるとそ 古奈宜 我波奈
かりの花 鬼 花と 伎奴 加奈思家
て思ん 花 鬼 花と 伎奴 加奈思家

おんとすれとうわりみとう
みやこ乃方すくみ 可保我波奈
おさとい てうねこもて 当のう
なそふるのこなきのつるをさぬるのすわ
あくまでのくうのせう加奈思家

ちるやおそくてこめくく 是れね心を 張アイをく ふるく
おくく乃こちるきこふ人安云こちるきと 同意 蓼野の 寄活
ふあせるこいやのれくとうこと ちくくもにをのふりいてく
おりとくなり人を 慧をすりる 家ふくすて 家に到るおねく
おきく妹をうちゆるめ

挽歌
未勘國歌一首 作者未詳

かくうき死別せんと 夜麻須気
いきくす妹き妹を
いうく我をいれゆん
こちいよそうひ
ま宵をくふ初り
しちうく今脇 旦
ひし山すけこ六 順和名麦門冬 やますけ 童蒙抄曰生すくし
事をうのとしこ六 訓ふをくり名安三六 山すけのうひとい安のそる
礼合心ちくく 帰心ひ

集三十巻別而雅ばん

貞享三年 寅 弥月 卅日書 新玉津嶋菴下墨付四十五枚 秀